

# 大学付属博物館の一つのあり方

橋 昌 信

## ( 1 )

大学付属の博物館は付属図書館と共に、大学の教育・研究機関の内容の豊かさを示すものと考えられ、教育・研究の場である大学での果たす役割は大きなものが期待される。しかしながら現状では博物館の働きは微々たるものと言えよう。そこで、今回、別府大学付属博物館を利用して実施された学生の調査研究活動の実例を紹介しながら、大学における付属博物館の一つのあり方を探ってみたい。

全国の大学ではそれぞれの研究室・教室を単位とした教育・研究活動が実施されており、また、サークル・クラブなどにおいても学生を主体にした各種の調査・研究活動が行なわれていることは今さら言う必要はないであろう。

一方、これらの教育・研究活動などの過程およびその結果や成果についての公開は、論文・報告書などの文字を媒介とした出版物による方法で発表されることが最も一般的で数多くみうけられる。また、ある集まりの人々に対して言葉で話されるいわゆる発表もある。これには学会発表などの専門的なものや、不特定多数を対象とした講演会など、やはり各種のものが認められる。これらの極めて普遍的な方法による調査・研究活動などの発表・報告はそれなりにその内容を対象者に伝えることができ効果が上がっている。しかしながら文字を読んだり、話しを聞くことはどうしても一方的になりがちであり、しかも抽象的な一面を持ってい

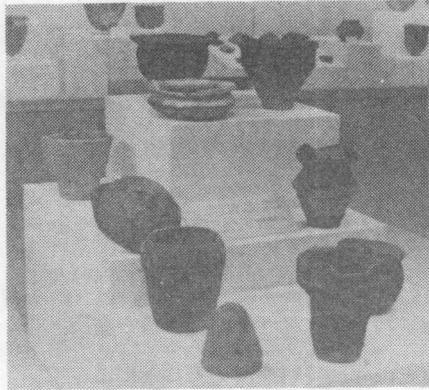
ることはいなめないであろう。そこで、文字や言葉による方法と同時に、調査・研究活動の内容をより具体的な実物・標本などの直接資料や模型・写真・図表などの間接資料を用いることによって、直観的に内容を訴える発表の方法、すなわち「展示」による発表方法なり機会なりがもっと積極的に教育・研究の場に組み込まれてよいように思える。

以下は約1年間におよぶ学生の自主活動の内容とそれを博物館の展示という形で発表した一例である。

## ( 2 )

別府大学短期大学部生活科家政専攻の6人のメンバーが中心になっておこなった自主活動のテーマは「縄文時代の食生活展—土器製作と調理実験—」である。縄文時代の食生活という課題は一概に論じられない大きな問題であり、これを本格的に取り組むとすれば、考古学をはじめとする多岐にわたるそれぞれの関連諸科学の専門分野のスタッフが3年間あるいは5年間の月日が費やされるかも知れないのである。そこで、今回のテーマの中心は植物性食糧に、しかもその調理の一端に向けられ、調理法の一つとして欠すことの出来ない土器製作から開始された。

なお、この一年間にわたる活動では家政専攻の6人のグループが積極的に実践したことは無論であるが、史学科や美学美術史学科の学生や教員、

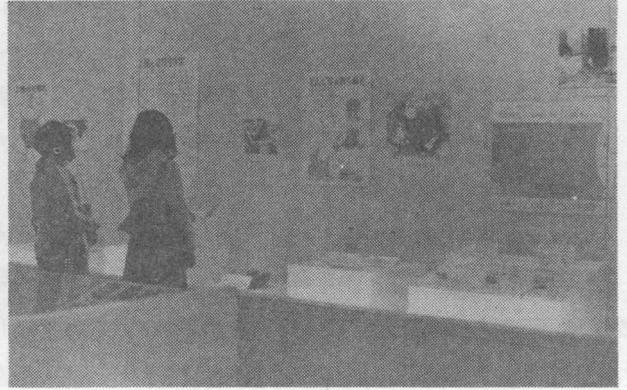


製作実験の土器

それに短期大学の食物科、初等教育科の教員など、それぞれの専門分野の人々の協力・指導がみられた。また、このテーマも最初から明確な形で存在したものではなく、活動の過程で次第に形づくられたものである。これらの2点は今回の活動の一つの特色とされよう。

**土器製作** このグループの自主活動の導入の役目をはたした作業であり、食生活への感心と興味を抱かせた。露頭から採取した粘土を砕いて粉にする仕事からはじまり、ローム・砂・腐植土の割合を変えての素地土の調合、混和材を入れた粘土に水を加えて根気よく練る作業。よく練り上げた粘土を用いての成形、文様づけ、土器の内外面のみがきを行ないながら約2週間の乾燥の後、学内の林でいよいよ焼成。これらの作業で約50日間を要した。前後2回の土器製作で12点の土器を焼き上げた。

**土器の水漏れと煮沸** 焼き上がった土器に水を貯え、調理の第一歩である煮沸を行なう。予想以上の水漏れのため、1時間近く炉にかけても水温は60℃前後にしかならず、水漏れ防止が必要となる。コンデンスミルク・血液・米のとぎ汁・それに牛脂などを内面に塗布するなどの方法をそれ



ケース内の展示

ぞれの土器で試み、見事に水漏れを防止することができ、短時間での煮沸が可能となった。

**調理実験** 土器を用いて、貝・クリ・イモなどを実際に煮る・蒸すなどいくつかの方法を用いて試みる。さらに校内で採集したドングリを使って水さらし・煮沸によるアク抜きをしてドングリだんごを作る。この他、米の炊飯を土器と電気ガマとで行ない、両者の糊化状況の比較を試みた。また調理の一環として、石の小刀を使用しての魚および鶏の解体、それにつわぶきの葉で包んだ魚のむし焼きも合わせて試みた。

これらが約1年間で実施した具体的内容の概要である。この活動の過程およびその結果をより多くの人達に知ってもらい、食生活の一端と一緒に考える機会にしたいという目的で、博物館展示室の一部を使って展示活動を実施した。

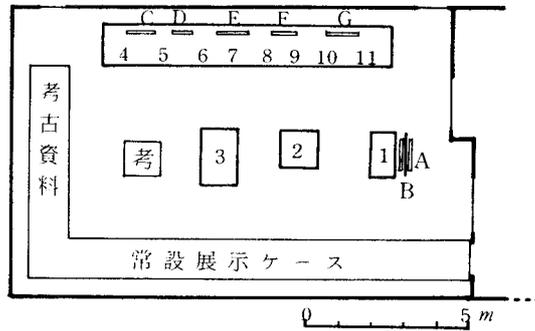
### (3)

展示は付属博物館で開催されている考古資料常設展示室の一部を利用した。展示は壁付けの個定ケース(9m×1.1m)とその前面のフロアーを使用した。第1図はその概略を示したものである。

展示ケース内には長さ・奥行きが30～90 cmの展示台9個を置き、それに調理に使用した土器・根茎植物・堅果類およびそれらから採取した澱粉、加工・調理で用いた石皿・敲き石・石小刀などの実物、それと堅果類の貯蔵穴の模型を配置した。壁面には文章および図からなる解説パネルを5枚、写真パネルを7枚、それぞれの実物に添えて掲げた。一方、展示ケース前面のフローアは土器製作に関するもので占られ、粘土から焼成までの過程を順番に実物で示し、さらに縄文土器の文様およびその施文具を粘土のモデリング・土器の拓影と合わせて展示した。これらフローアの展示資料は見学者が実際に手を触れ、より直接的に観察できるようにとの配慮から階段状をした展示台に直接置き、1個用いたのぞきケースも上面のガラスを取り除いた。

これらの展示に先だっては当然のことながら、根茎植物・堅果類などの実物資料の収集、関連資料の文献収集が行なわれた。また解説の文章およびそのパネル書き、写真の焼付けなどの仕事も学生や教員の指導・協力の中で実施された。実物資料や間接資料のレイアウトは限られたスペースをいかに活用するか、どのように見せることがより興味と理解を深くするかなど、グループにとって初めての仕事も経験した。

このようにして、1年間にわたり学生が主体となり行なった調査研究活動のまとめともいえるものが展示という形ででき上がったのである。なお、紙面の関係で詳しく説明することができないが、これらの活動は展示というまとめの他に、16ページの印刷物と約13分間の8 m/m フィルムによる記録映画を作成したことも付け加えておきたい。



第1図 展示資料と解説パネルの配置

### 実物・標本と模型の展示資料

1. 土器製作の工程資料
2. 縄文土器の施文具と粘土のモデリングならびに文様の拓影
3. 製作実験の縄文土器
4. 調理に使用した製作土器
5. 根茎植物
6. 堅果類の加工で使用した敲石と石皿
7. ドングリ類のあくと灰汁
8. 堅果類の澱粉標本
9. ドングリ類の貯蔵穴模型
10. 堅果類の実
11. 製作使用した石小刀と貝のヒシャク

### 解説パネル

- A 土器製作の意義
- B 土器製作の工程、縄文土器の文様
- C 土器の水漏れと防止
- D 土器と植物性食糧
- E どんぐりのあくぬき
- F 各種デンプンのアミノグラム(粘度図)
- G 植物遺体の出土遺跡分布図

#### ( 4 )

ある一つの調査・研究活動を行なった際、それらのまとめをいかにするかは極めて大切な仕事であり、ここでは従来多く見られる文字や、言葉を主体にしたものとは異なる、実物・標本・模型・写真・図などを用いた「展示」という形のまとめに目を向けたわけである。

展示は資料と見学者とのより直接的な結びつきが予想されるものである。文字や言葉による発表が、読者や聴衆に対してどちらかと言えばやや一方的な働きかけの一面が表われやすいのに対して展示は見学者が直接、資料を目にすることで、そこから自由な発想や創造・思考の余地が残されるとみなすことができよう。無論、展示それ自体も資料の選択から始まってその解説まで、それなりの一つの考え方、見方によってプログラミングされているのであるが、それだけに、展示される資料そのものについての十分な科学研究が必要とされるであろうし、同時に、その資料をいかに展示することによって、より強い結びつきが期待されるかを、教育学的なあるいは心理学的な分野からの検討が不可欠な要素となる。ここで、新たな視点からそれぞれの調査・研究活動を見なおしまとめを行なう必要に迫られるであろう。これはそのまま活動の内容を充実することにつながることもなる。

大学付属博物館では館の目的に沿った形で計画され実施される展示活動があり、この多くは常設展や企画展と呼ばれるものである。館独自の展示活動と併行して、館の活動に支障をきたさない範囲で、学内の研究室を中心に進められている教育研究活動の一端や学生の自主活動の一部が展示という形で発表されることによって、学内の教育・

研究がより多くの人達に環元される一つの方法と考えられる。このような試みが積極的に実施されることによって、付属博物館が大学での教育・研究の一つの機能を果たすことになり、図書館と同様な位置づけが確立するものと思える。

#### ( 5 )

日本の教育は明治以来「学校教育」に集中しており、それも教科書・参考書などによるいわゆる文字による教育・学習が中心的な役割をはたしている。それ故、調査・研究の経過およびその結果や成果についてもやはり文字によって発表されるということに重点が置かれているものと考えられるのである。

発表の一つのあり方として直接ないしは間接資料である実物・標本・模型・写真・図絵などを使用しての展示に目が向けられるためには、一方では具体的な小さな積み重ねによってその成果を示す必要がある。また、もう一方では教育や学習に対する考え方や方法なりについて研究や検討が行なわれる必要がある。すなわち文字を主体にした学習・教育の中で、実物などの資料の利用がもっと積極的に考えられてよいように思える。

現今の小・中学校におけるつめ込み主義的な教育に対する一つの反省は同時に学校の付属博物館存在の必要性とその利用の機会・方法が問われているものと思えてならない。大学の付属博物館もまたしかりである。